

## 左京区BBS会会長賞

## 社会をよりよい環境にするために

京都市立修学院小学校六年 橋爪 柚希

母が、ある本の話をしてくれました。その本は、「母という呪縛 娘という牢獄」という本で実際にあった話なんだそうです。内容は、母親から精神的・身体的暴力を受け、自らの道をずっと決めつけられてしまった娘が母親を惨殺してしまうというお話です。その娘は、最初、全然、容疑を認めませんでした。その理由は、父親のことを「殺人を犯した娘の父親」ではなく「普通の父親」の立場を守るためだったのです。私はこの本の話を知ったとき、衝撃を受けました。

私は何度か、母と激しいケンカをしたことがあります。その時、もしかしたら、私は母を憎んでいて、消えてほしいのかなと自分に問いかけました。でも母がいなくなった我が家がいまいち描けなくて（思い描けたとしても、とてもつらく、苦しい日々となった）、そこから、こんなに相手が憎く、煩わしくなっても、私は母を愛しているのだなと感じたのです。それから自分の母とは、世界に一人しかいなくて、代わりはいないのだと、私は思うようになりました。

なのに、この本の主人公は、そんな自分の気持ちを無視し、本当に消してしまっただけです。ですが、決して、その娘が人間でないような冷酷な人間だとか、最低な人間だとか言うつもりはありません。きっと、人間としての気持ちが押しつぶされてしまうほどに辛く、苦しみ、憎んでしまっていたのだと思います。でも、親を消してしまっただけで、狂ってしまった人が、父親のために行動を起こしたことに、私は驚きました。

そのあと、父親が何も言わずに娘のために着替えなどを買ってきました。娘が父親に「どうしてこんな私に良くしてくれるの?」と言うと、父親は「家族だから」と言いました。そこから、物語はさらに進展します。娘は、「も

しかしたら、父は、私のことを許してくれるのかもしれない」と思い、罪を認め有罪になったのです。

私はこの本から、「犯罪のこと」をたくさん学びました。犯罪には、罪に見合うほどの「理由」があったのかもしれないこと、そして、犯罪者は、思ったより普通で、どこにでもいるような人で、ほんとはすごく優しく、たった少しのきっかけで狂ってしまったのかもしれないこと。自分や、自分の隣にいる人は、今は違うだけで、もしかしたら将来、テレビで報道されているのかもしれないのです。こんな悲しい犯罪をなくしていくためには、今回の事件の、元凶となってしまう「環境」。犯罪を防止するうえでは、環境や、自分の理解者がいる環境。そんなものが、犯罪を防止するうえで、一番大切なのではないか、と私は考えます。そのために、私ができることは、悩みを相談してもらえようような人になること、周りを傷つける発言を無意識でも気を付けていくことだと思います。